

いったいなぜ？

意外に知らない母校の不思議



在校生時代には何も思わずに眺めていた母校の風景。でも卒業して改めて見直すと、あれ、これってどうして？
そう思う事はありませんか。

岡山朝日高校は昭和 25 年に現在の地で新しい歴史を刻み始めましたが、ここは元々旧制第六高等学校の校地。造成が始まった年から数えると実に 118 年の歴史があります。それだけにここにはたくさんの不思議が隠されています。そのうちのいくつかを取り上げてみました。

①門柱の溝



3 年間通り続けた正門の両側にある門柱。4 本の門柱の外側に添えられた石には二本ずつ縦の溝が切られていたのを憶えていますか。この溝は何のためにあるのでしょうか。

朝日高校の敷地は第六高等学校のもを受け継いでいます。その六高が開校したのは明治 33 年で、その当時の写真を見ると、すでに現在の正門は存

在していました。その門柱の外にある石を「榎門石」と言い、洪水などで周囲の水位が上がって来た時、二本の溝にそれぞれ堰板と呼ばれる木の板を落とし込んで、その両側に土嚢を積みました。これで 1 メートル程度の洪水ならキャンパスは守られるはずですが、しかし 4 メートルを超える水深を記録した昭和 9 年の室戸台風には無力でした。

②変わったベンチ

正門に入って左側、クスノキの大樹の下に石のベンチがいくつも置かれています。そのうちの手前にある長細い二本の石、ちょっと不思議な感じがしませんか。実はこれ、つい最近まで正門の中央北側の門柱だった石です。この石に昭和 63 年、工事車両がぶつ

かりました。石の真ん中に亀裂が入ったため、しばらくは鉄骨の添え木をして補強しましたが、平成元年に新しいものと取り替えられ、折れた柱はベンチとしてここに置かれました。

その奥にある別の形のベンチは、六高時代に踏み石（通路に敷かれる石）として使われていたものです。時代が変わって通路がコンクリートになり、役目を終えたためベンチや正門両脇の置石などとして使われています。

